

DOSHISHA

Tokyo Journal

同志社東京ジャーナル

2026
Spring
No.143

「2026 同志社東京 春の集い」ご案内

新島襄 ふたつの碑前祭

・終焉之地碑前祭 ・生誕之地碑前祭

同志社フェア in 愛知・名古屋

東京オフ会 2026

東京校友会関連諸団体 2025 年度活動レポート

「平成」「令和」卒業の校友クローズアップ：辻倉 空 さん

今出川・京田辺四季：七條千恵美さん

校友訪問：タダシ☆タナカさん

校友の店：薬膳食堂 うまつ（西麻布）

同志社スポーツ：冬季五輪で初のメダル 森田真沙也選手

校友会「俳壇」 定時総会・評議員会ご案内

Cover Person : 佐伯ひろみさん
(ジャズシンガー)

COVER PERSON

ジャズシンガー・佐伯ひろみさん(88年・文)

昨年、活動拠点をニューヨークから京都に移したジャズシンガーの「2026 同志社東京 春の集い」出演が決定。ジャズアレンジのカレッジソングが帝国ホテルに響く!



老舗ライブハウス『BODY & SOUL』で。この日は昼のライブ。『Blue Sky』など空にまつわる曲を集めて歌った。撮影/仁藤正平(78年・商)

ニューヨークを拠点に、長く活動してきたジャズシンガー、佐伯ひろみさん(88年・文)。
音楽は幼いころから身近にあった。4歳のときヤマハの音楽教室に入った。同志社中学から高校、同志社大学文学部心理学専攻(当時)に進学したときにもレッスンを続けていた。大学時代には、レストランや結婚式場での演奏、弾き語りの仕事が続々と舞い込み、すでにプロとしての活動が始まっていた。
「でも歌手になろうなんて、思ってもいませんでした。仕事が多くなってきたので、覚えるしかなかった。気がついたら音楽でお

金をいただいていた」
転機は19歳のとき。ジャズの巨匠・古谷充氏との出会いだ。「古谷先生に出会って、それまで、なんとなくやっていた音楽が、一気に変わりました」
大学卒業後も歌手活動は順調だったが、佐伯さんは次第に、自身の表現に違和感を覚える。「自分の発音や表現が、現地で聴くそれとはまるで違うって気がついたんです。RとLの音の使いわけ、thの発音、語尾の破裂音。どれも全然違う」
発音の違いは、単なる語学の問題ではなかった。
「ちゃんと発音するとリズムが生まれるんです。言葉が音楽になる。発音ができていないと、グルーブが出ないんですよ」
1992年、ニューヨークへ移住することを決意した背景には、そんな気付きがあった。
渡米後、アームスト大学の夏季講習で憧れのジャズシンガー、



4回生のとき小嶋ゼミの旅行でディズニールンドと伊豆へ

シラ・ジョーダンに出会う。さらにその縁で、ニューヨーク市立大学シティカレッジへ進学。伝説的ベーシスト、ロン・カーターらに学びながら、語学の壁とも奮闘した。
「英語は本当に苦手で、最初は全然ダメでした。あのときが一番しんどかったかもしれません」
生活のために始めた映像制作の現場では、やがてコーディネーターとして頭角を現す。日本からの取材や撮影を支える仕事で信頼を集め、日本のテレビや雑誌の関係者に「ニューヨークのことならヒロミに頼め」と頼られるようになった。
「音楽では食べていけないので始めた仕事ですが、気がつけばずいぶん長くやりました。楽しかったけど、でも本当にやりたいたいの、やっぱり音楽なんです」
その思いは2024年に発表した初のアルバム『When The Moon Shines Upon Us』へと結実する。制作にあたっては、ミュージシャンの手配からスタジオの確保、さらには権利関係の調整まで、すべて自ら動いた。
コーディネーターとして長年積み重ねてきた、人脈をたどる



NYでコーディネーターとして活躍していたころ。国連本部を取材するドキュメンタリーの制作会議

経験が、このとき役に立った。
「著作権管理団体では許諾が取れない楽曲があったのですが、人のつながりをたどって、ようやく作曲家の方を探し出したんです! ああ今までの経験が全部役に立つんだと思いました」
音楽と、それ以外の仕事。
その両方を歩んできた時間は、けっして遠回りではなかった。
「人生、無駄なことは何ひとつない。全部つながっています」
昨年、活動拠点を京都に戻して日本での活動を本格化させている彼女の歌声を、来月、生で聴けるチャンスがある。5月23日に帝国ホテルで開催される「同志社東京 春の集い」への出演が決定したのだ。当日はジャズアレンジのカレッジソングも披露されるという。楽しみだ。
文/和田守弘(82年・法)